

乙 貞

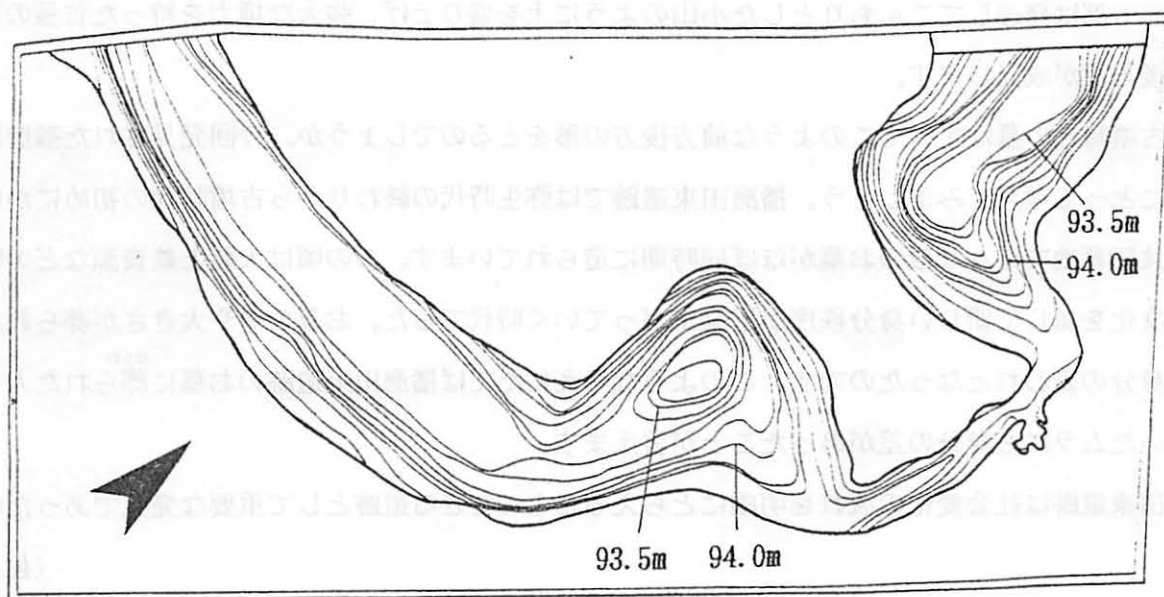
第93号 通巻17巻第2号
1997年7月15日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
☎0775-85-4397

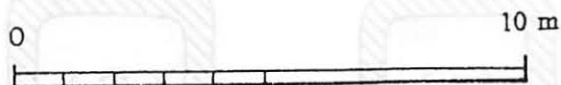
〒524-02
守山市服部町2250番地

播磨田東遺跡で前方後方型周溝墓を発見

はりまだひがし 播磨田東遺跡で、古墳時代前期の^{ぜんぽうこうほうがたしゅうこうぼ}前方後方型周溝墓が発見されました。^{ふんきゅう}墳丘は全体が調査できなかったのですが、^{きば すいてい}規模は推定全長14m、^{こうほうぶ}後方部の長さ9m、^{ぜんぽうぶ}後方部の幅推定10.3m、^{ぜんぽうぶ}前方部の長さ5m、^{ぜんぽうぶ}前方部の幅が3.7mありました。周囲を取り囲む溝はたいへん深く1.2mもありました。このような形の墓は有力者が葬られたものと考えられ、古墳の発生を知る上で貴重な発見です。また、現在までには滋賀県内で10基ほど確認されています。地域的にみると湖北で1基、湖東で1基、湖南で8基発見されています。今回の発見を加えると11基となり全体の約80%が野洲川を中心とした地域に集中していることがわかります。このことは野洲川流域が滋賀県古墳時代のはじまりを知る上で重要な地域であることを物語っています。



播磨田東遺跡前方後方型周溝墓等高線図



^{おとさだ}「乙」^{はっとり}「貞」は服部遺跡の調査で出土した銅印に刻まれていた文字で、奈良時代末頃のものと思われます。大きさは約3.3cm×3.3cm、高さ約4.2cm、重さ約75gです。この銅印は^{こういん}公印として使用されたものではなく、個人印として使用されたものと考えられます。

お墓の形がかわること ～方形周溝墓から前方後方墳へ～

今回、播磨田東遺跡で前方後方型周溝墓が発見されました。新聞などで大きく取り上げられ、現地説明会も行われるなど重要な発見でした。

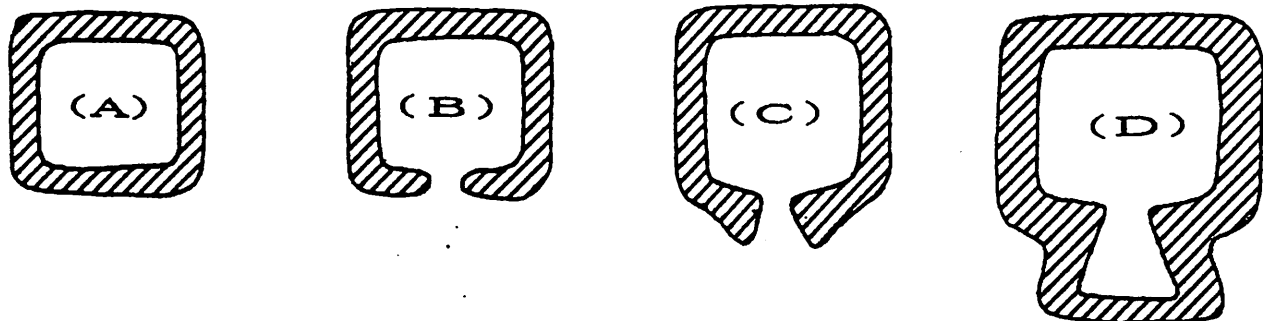
では、何が重要な発見だったのでしょうか。形の違い、時期などから考えてみましょう。

弥生時代の近畿地方のお墓は主に、方形周溝墓（溝を四角形にめぐらせ、掘った土を溝の内側に盛り上げてそこに人を埋葬する…(A)）がつくられました。しかし弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけて、方形周溝墓の周溝の一辺の中央部を掘り残すなど、方形周溝墓の形が変化してお墓が造られるようになります。これには図(B)、(C)、(D)などの形があり、(D)は前方後方墳と呼ばれる古墳と形態的に非常に似ていますが、規模が小さいことや、いわゆる古墳に備わっている埴輪や葺き石などがみられないことから、前方後方墳とは区別して、便宜的に前方後方型周溝墓と呼んでいます。このお墓は弥生時代の方形周溝墓と古墳時代の前方後方墳とをつなぐ形として理解されています。お墓の形が方形周溝墓から前方後方型周溝墓、そして前方後方墳へと移り変わっていくのです。具体的に言いますと、まず方形周溝墓の周溝の一辺の中央部を掘り残すことで前方部（突出部）が形成されます。この前方部は埋葬施設（棺を埋める場所）へ向かう道として使われたと考えられており、葬儀の際の祭りの場でもあったようです。次に前方部は(B)→(C)→(D)の順に大きくなりますが、土はあまり高く盛りません。やがて前方部は発達してこんもりとした小山のように土を盛り上げ、強大な権力を持った首長の墓として前方後方墳が成立します。

では古墳時代の墓はすべてこのような前方後方の形をとるのでしょうか。今回発見された播磨田東遺跡を例にとって考えてみましょう。播磨田東遺跡では弥生時代の終わりから古墳時代の初めにかけてのムラの共同墓地で様々な形のお墓がほぼ同時期に造られています。この頃は大陸と鉄資源などの物資の交流や文化を通じて新しい身分秩序が出来上がっていく時代でした。お墓の形や大きさが葬られた人の生前の身分の表われとなったのです。このような考えにたてば播磨田東遺跡のお墓に葬られた人々が暮らしていたムラにも身分の差があったことが言えます。

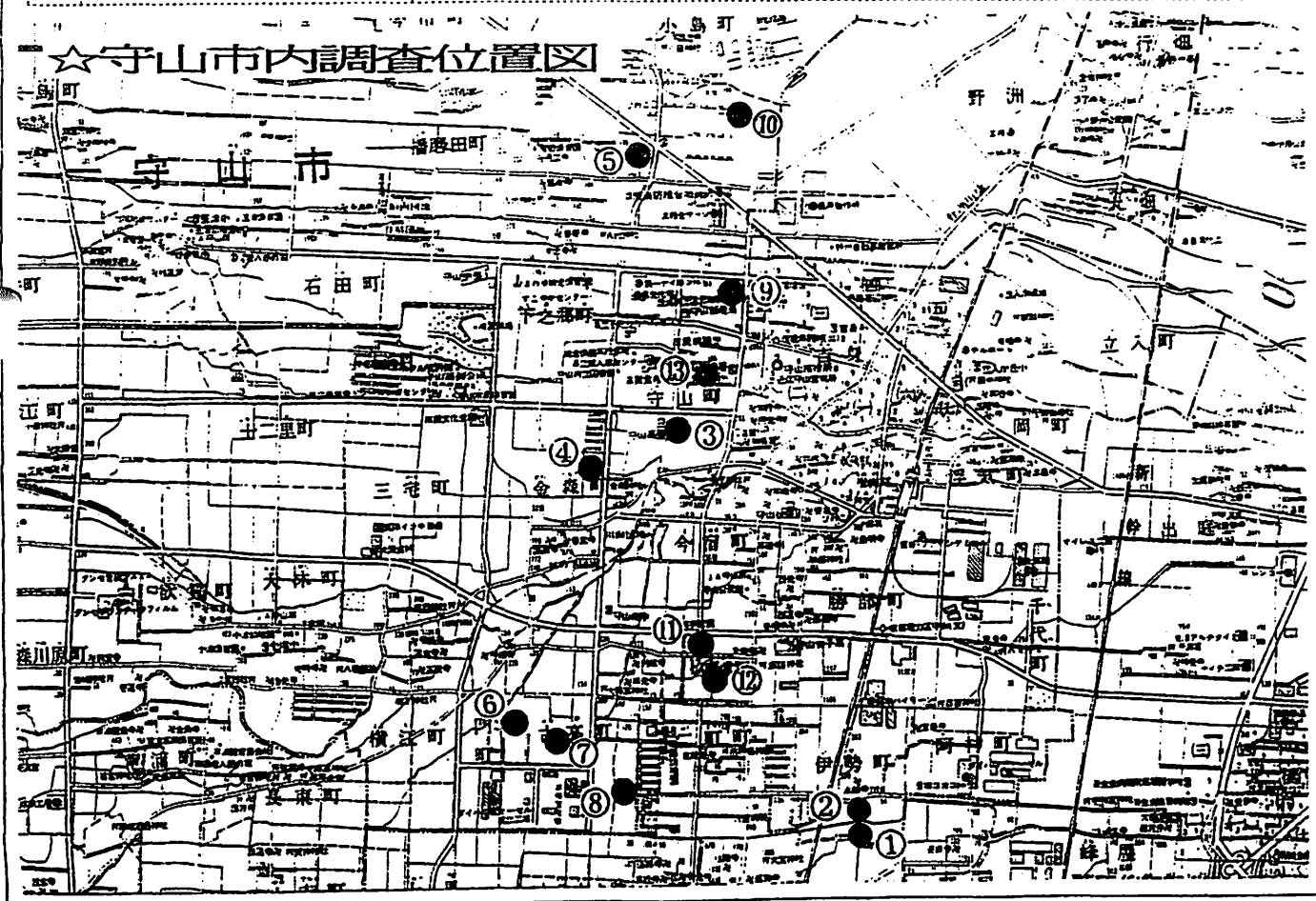
播磨田東遺跡は社会変化の流れを明確にとらえることのできる遺跡として重要な発見であったのです。

(佐々木)



§ 発掘調査だより §

N0	遺跡名(調査回数)	調査地	調査期間	調査面積	担当者
①	伊勢遺跡(第40次調査)	守山市伊勢町字上	H9 4/24~H9 6/13	約320㎡	中村
②	伊勢遺跡(第41・42次調査)	守山市伊勢町字西	H9 5/16	約40㎡	小島
③	金森東遺跡(第12次調査)	守山市金町字小勘町・字太田・字大澤	H8 10/22~(継続調査)	約8000㎡	小出
④	金森東遺跡(第13次調査)	守山市金町字大言・字塚	H9 6/2~H9 6/7	約100㎡	大岡
⑤	酒寺遺跡(第43次調査)	守山市酒部町字上	H9 5/29~H9 6/14	約300㎡	小島
⑥	下長遺跡(第17次調査)	守山市古瀬町字	H8 10/17~(継続調査)	約8000㎡	岩崎
⑦	下長遺跡(第18次調査)	守山市古瀬町	H9 5/3~(継続調査)	約1000㎡	伴野
⑧	塚之越遺跡(第13次調査)	守山市古瀬町字水	H9 4/23~(継続調査)	約6500㎡	畑本
⑨	二階・敷遺跡(第29次調査)	守山市守山6丁目字上	H9 4/24~H9 4/25	約100㎡	小島
⑩	播磨田東遺跡(第7次調査)	守山市播磨田町字宮部	H9 5/1~H9 6/27	約550㎡	藤原
⑪	古高遺跡(第12次調査)	守山市今瀬町字口津田	H9 4/21~H9 5/23	約120㎡	川畑
⑫	古高城遺跡(第9次調査)	守山市龍郷町字友	H9 4/25~H9 5/16	約300㎡	大岡
⑬	吉身西遺跡(第82次調査)	守山市守山4丁目字南高田	H9 5/19	約120㎡	佐々木



①伊勢遺跡 (40次)

弥生時代中期から中世にかけての自然の川を検出しました。この川の跡は北東から南西に向かって流れていたものと考えられます。

さて、今回は中世(13世紀から14世紀頃)に流れていた河川から出土した牛骨について説明したいと思います。牛骨が出土した川は幅約4m、深さ約0.5mで、流れはさほどなく流れていたと考えられます。牛骨はバラバラに出土しており、おそらく解体して棄てたのではないかと思います。また以前の調査(第28次)でも同様な状況で1箇所密集して出土しました。今回の調査で2頭以上、以前の調査(第28次)では4頭以上の牛が解体され短期間で棄てられたものと考えられます。

それではなぜ、この川に牛骨をまとめて棄てたのでしょうか?その理由として次のことが考えられます。(1)疫病が広まったため殺して川に棄てた、(2)皮革製品を作るため牛の皮をとった後棄てた、(3)食用のため肉をとってから骨を棄てた、(4)何らかの祭りのため生け贄を捧げた、などです。今はまだ可能性の段階で明確にはできませんが、今後、整理調査を進めていく上で、中世という時代背景も含めてなぜこの川に牛骨を棄てたのかを考えていきたいと思います。

(中村)

②伊勢遺跡 (41次, 42次)

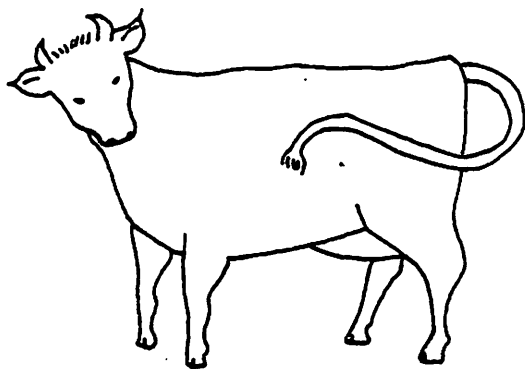
2件の個人住宅建築に先立ち、伊勢町字西浦で発掘調査を実施しました。調査の結果、自然地形とみられる落ち込みや、古墳時代前期の土器が出土した自然の川などを検出しました。

(小島)

③金森東遺跡

去る5月23日・26日・27日の3日間にわたって、吉身小学校の6年生を対象に遺跡の発掘調査の体験学習を実施しました。生徒の皆さんには事前に『遺跡って何?』、『考古学ってどんな学問?』といった内容のことを勉強してきてもらいました。当日は10~12世紀頃の溝を掘削し、土師器や須恵器、黒色土器など多量の遺物を子供たちが見つけました。土器片が出るたびに歓声をあげていた子供達の姿がとても印象的でした。現在の地表面からわずかに下がったところに、今から1000年以上も前の人が暮らしていたという事実を、子供達は不思議そうにとらえていました。なぜ長い時を経て土が埋まってしまうのかということについては、今後『乙貞』なかで触れていく予定ですので皆さんも考えてみてください。

ところで、考古学という学問から導きだされた事柄は、もっとも高い可能性のものを示唆しているにすぎないということを皆さん方は知っていましたか。ですから私たちが述べている事柄はひとつの可能性であって絶対的なことではありません。これから歴史を学んでいく小学生に限らず、皆さん方一人ひとりが目の前の事柄をどのように判断されようともそれは自由です。確かにこれはこういうことだというひとつの結論を提示できれば皆さん方にもよくお分りいただけるのですが、日本は木の文化です。



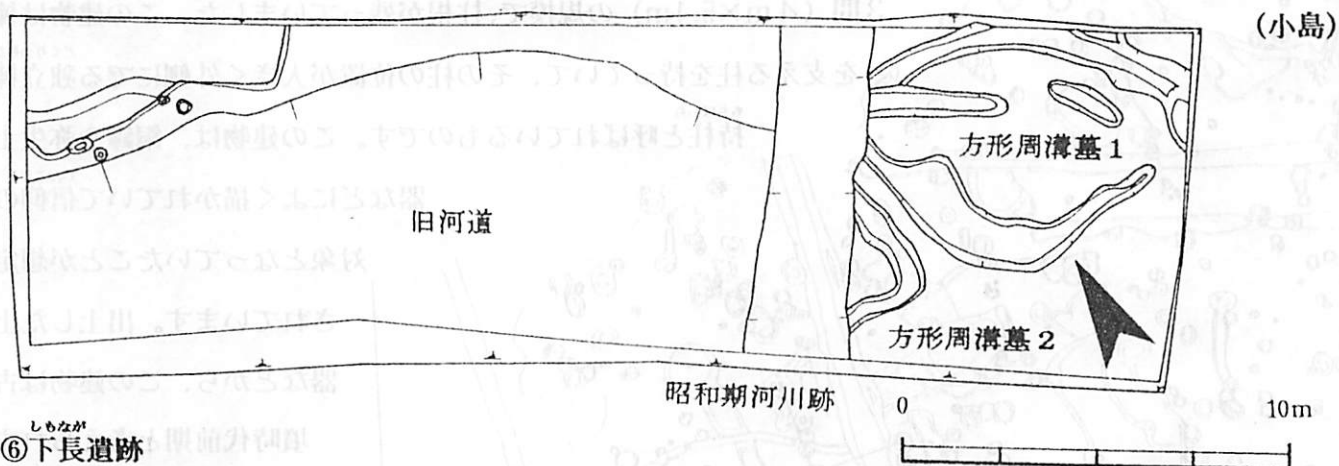
石の文化の西洋とは異なり、木は腐^{くさ}ってしまっ^{たてあなじゅうきよ}て残らないことが多々あります。竪穴住居や掘立柱建物^{ほったてばしらたてもの}を例にとってみましょう。現在まで残るのは、柱を埋めた穴、つまり過去の人が大地に残した痕跡^{こんせき}です。木質部分が残ることはあっても実際どれくらいの柱が立っていたのかは想像の域を出ません。ですから各地で復元住居として存在するものは、発掘調査で導きだされた様々な可能性や民族例などをもとに復元されたものであり、100%当時のものではないのです。小学生の皆さんにとって、当日体験したことが今後歴史を学んでいく中でより豊かなイメージとして実らせていけること期待します。(小出)

④金森東遺跡

今回の調査では古墳時代の溝と須恵器が見つかりました。しかしそれらの数が少ないことから、集落のはずれにあたる地区を調査したものと思われます。(大岡)

⑤酒寺遺跡^{さかでら}

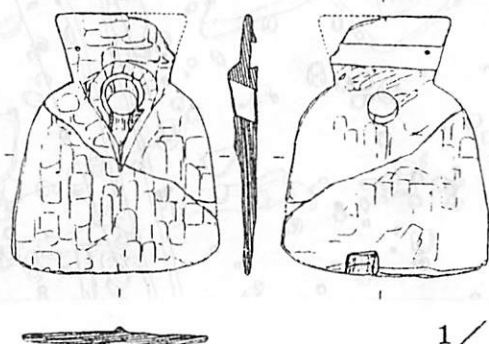
共同住宅建築に先立ち、播磨田町字平成の里において発掘調査を実施しました。調査の結果、弥生時代後期頃と考えられる方形周溝墓と古墳時代前期^{きゅうかどう}の旧河道や溝、それに昭和期の河川跡を検出しました。方形周溝墓は2基見つかりましたが、いずれも古墳時代に流れていた川に削られており、あまり良い状態で残ってはいませんでした。これまでも区画整理にともなう発掘調査などから、弥生時代中期・後期の方形周溝墓群が周辺から見つかっており、今回検出した方形周溝墓もその一部と考えられます。



⑥下長遺跡^{しもなが}

古高町の工業団地北西側で、昨年10月から実施している下長遺跡の発掘調査について報告します。

現在は、遺跡の中央部を南北に貫いている旧河道を調査中です。川幅18m前後、深さ2mの規模で、やや蛇行しながら横江町方向に下がっていますが、灰色粘土の下層に厚い何層も^{ゆうきしつどうそう}の有機質土層^{たいせき}が堆積^{だくう}していて、この土層から多量の遺物が出土しています。土器や石器の他に、きわめて保存状態の良い



木器^{もくぐ}が多数出土しています。主な種類は、(1)農具^{のうぐ} (鋤柄^{すきえ}、鍬^{くわ}、横槌^{よこづち}、木錘^{もくすい}、竪杵^{たてぎね})、(2)武器^{ぶき} (楯^{たて})、

(3)雑具(火鑽板、箱、腰掛け、杓子)、(4)工具(斧柄、掛矢、楔、篋)、(5)漁労具(網杵、アカスクイ)、(6)土木部材(杭、矢板)、(7)建築部材(梯子、原材?、棟押し?、柱材や板材)、(8)容器(槽、盤、剝抜桶)、そして様々な紡織具、祭司具などがあります。

中でも特筆すべきものとして楯と建築部材を報告します。楯は、両面に水銀朱を塗ったものと部分的に黒ウルシを塗った2点が出土しています。いずれも断片にとどまりましたが、市内出土例では4遺跡目を数える貴重な遺物です。また、建築部材についても住居の様々な部材が出土していて、当時の住居の構造を考える上でとても参考になります。

木器は腐食しやすいため、発掘調査で出土することも少ないのですが、今回の調査では大きな建築部材まで含んだ多種多様な木器が出土していて、「木の文化」、「木工技術」を知る上でまたとない調査成果であるといえます。

(岩崎)

⑦下長遺跡



5月上旬から工場建築工事に先立ち、古高工業団地内(サンメディカル株式会社)で約1500㎡を対象に発掘調査をすすめています。今回の調査地点は下長遺跡のなかでも中心に近く、多くの遺構が検出されています。調査地の南西部からは多数の柱穴が見つっています。掘立柱建物は2間×3間(4m×5.1m)の規模で、柱根が残っていました。この建物は棟を支える柱を持っていて、その柱の位置が大きく外側にできる独立棟持柱と呼ばれているものです。この建物は、銅鐸や弥生土器などによく描かれていて信仰の

対象となっていたことが想定されています。出土した土器などから、この建物は古墳時代前期と考えられます。調査区の北東部は旧河道が検出されています。この川は古墳時代前期に埋まりはじめたと想定され、その埋没過程で4回以上にわたり水田をつくっていたと考えられます。

水田については現在調査中なので、次号でその成果をお知らせしたいと思います。

(伴野)

つかのこし
⑧塚之越遺跡

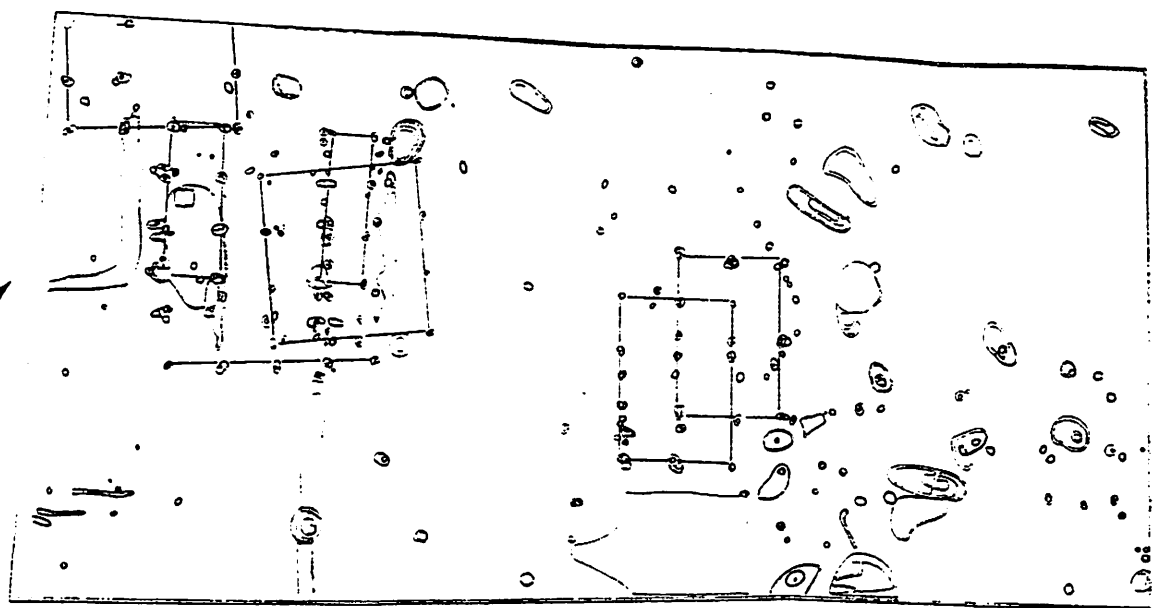
調査地全体のうち、現在T-1、T-2と呼ぶ地区、約1900㎡について発掘を行っています。T-1調査区では、地表下約20cmで遺構を検出し、さらに10cm掘り下げたところで下層遺構を検出しました。上層遺構ではピットを全部で60穴程検出しましたが、建物としてまとまる配置ではありませんでした。他に土壌^{どこう}5基を検出したにとどまりました。

下層遺構は、現在の土地地割^{じわり}とほぼ同一方向の溝が2条と、調査区外へのびるL字状の溝を検出しました。また、これらの溝と並行に並ぶ直径約10cmから30cm大のピットも検出し、4、5棟の建物が想定できます。建物群より少し離れた位置には、曲物^{まげもの}を枠^{わく}に使った井戸が1基見つっています。

これらの遺構は、出土した土器からおよそ13世紀後半～14世紀にかけての時期と考えられます。

(平安時代～鎌倉時代)

(畑本)



にのあぜ よこまくら
⑨二ノ畦・横枕遺跡

店舗建築に先立ち、守山6丁目で約100㎡を対象に発掘調査を実施しました。調査の結果、弥生時代中期後半頃と考えられる土壌とピットを検出しました。ピットのうち3つはほぼ等間隔^{とうかんかく}で1列に並んでいることから、建物として復元することが可能です。

(小島)

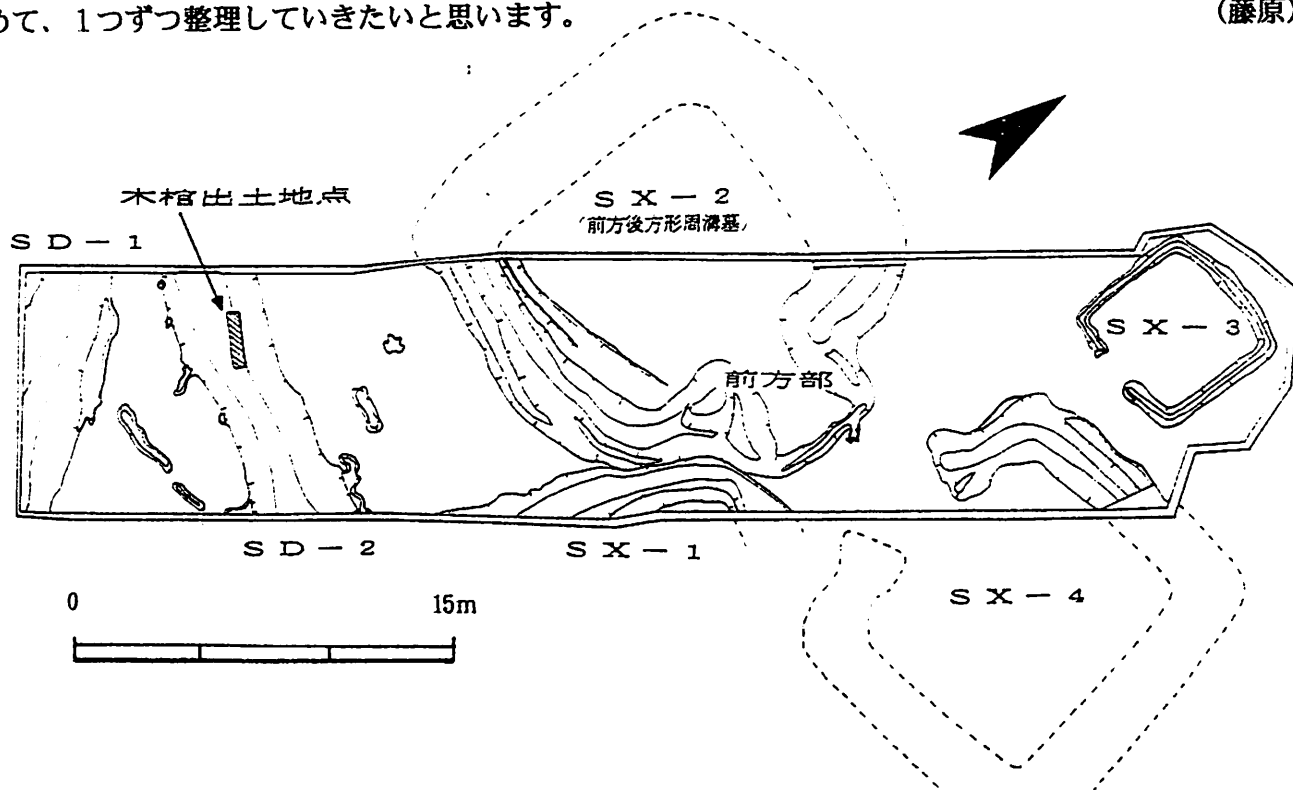
⑩播磨田東遺跡

今回の調査地は、播磨田東遺跡の東の端にあたります。調査地からは、周溝墓4基(SX-1・2・3・4)と、溝状の遺構2条(SD-1・2)などが見つかりました。周溝墓は4基ともあまり時期差はなく、古墳時代前期頃と考えられます。市内では、古墳時代における前方後方墳のような前方後方型周溝墓(SX-2)は、益須寺遺跡・経田遺跡・塚之越遺跡・横江遺跡で見つっており、今回で5遺跡目にあたります。全長は推定14m、前方部幅3.7m、後方部幅推定10.3mです。これは前述の4基にく

らべ極端に小さいといえます。後方部は埋葬施設が置かれたと考えられ、それをめぐる溝は深いところ
 で約1.2mありましたが、前方部前面の溝は浅く、30cm程しかありませんでした。溝の底からは、お供え
 していたと考えられる土器が、壊れた状態で見つかっています。墳丘はのちに削られてしまい、現在は
 平らになっていますが、お墓がつくられたころには1～2mほどの高さがあったであろうと考えていま
 す。SX-3は一辺6.4mの周溝墓です。西側の溝からは赤色顔料のついた土器のかけらが見つかってい
 ます。次にSD-2ですが、これは弥生時代の終わりに短期間で埋まったもののようです。そして
 溝の底近くからは、コウヤマキで造られた木棺（木でできた棺桶）が見つかりました。この木棺は一部
 腐ってなくなっていますが、保存状態が良く、長さ約2.3m、幅約0.5m、高さ約0.1mの大きさです。
 副葬品や人の骨などは見つかりませんでした。木の使い方や木棺の組合せを知る大切な手がかりとな
 ります。

この木棺が見つかった場所や状況は、私たちに様々な問いを投げかけています。今後多くの情報を集
 めて、1つずつ整理していきたいと思います。

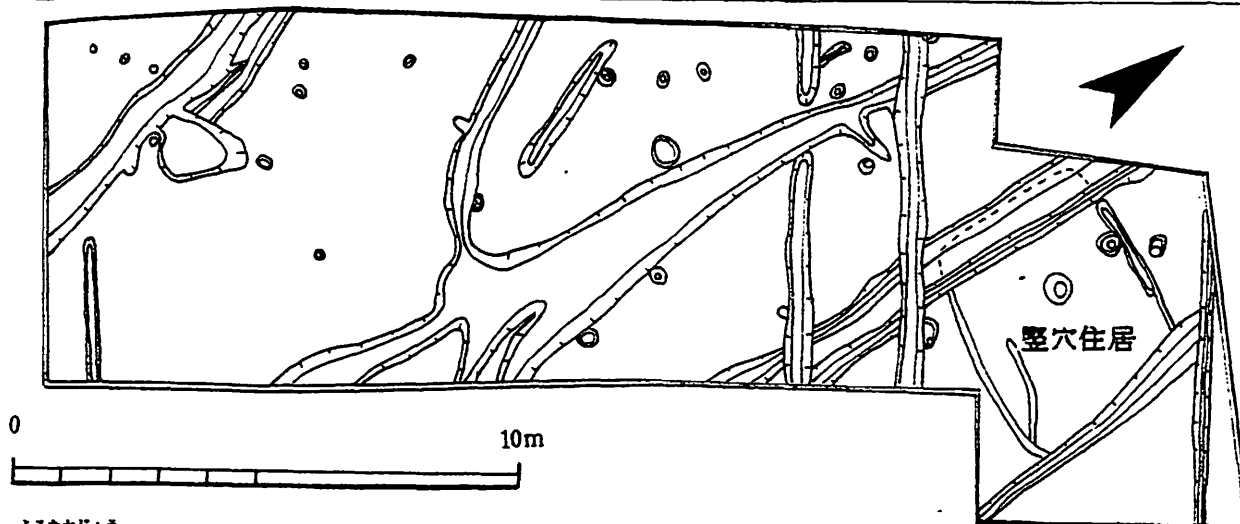
（藤原）



⑩古高遺跡

守山南中学校の北東隣の畑地（約120㎡）で共同住宅の建築が行われることとなったため、事前に発掘
 調査を行いました。その結果、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居（1棟）や溝など
 が発見されました。見つかった竪穴住居は、小規模なもので長方形の平面プランをしています。中央に
 は焼土や炭化物がつまった小穴があり料理などの際に火を焚いた場所だったのでしょうか。周辺で行われ
 た調査（平成3年度）でも同じ時期の住居跡が3棟ほど見つかっています。村の規模がどの程度に広がる
 のか、今後の課題です。

（川畑）



よるたかじょう ⑫古高城遺跡

昨年度以前に行われた調査から、弥生～古墳時代、奈良～平安時代、中世～近世の3時期にわたる集落跡が確認されています。今回は古墳時代の柱穴と須恵器が見つかりました。しかし、それらの数が少ないことから、村のはずれにあたる地区を調査したものと思われる。(大岡)

よしみにし ⑬吉身西遺跡

昨年度以前に行われた調査から吉身西遺跡は、縄文時代後期には集落が営まれ、弥生時代中期には方形周溝墓が造営されるなど各時代にわたる複合遺跡です。今回の調査では、中世の掘立柱建物跡が見つかりましたが、後の時代の溝によって一部が壊されていました。(佐々木)

【埋蔵文化財センター歴史入門講座のお知らせ】

埋蔵文化財の調査成果を通して、市内の歴史理解を深めるため、年6回の講座と現地見学を開催します。講師はセンター職員で行い、わかりやすい解説とスライドなどを利用した講座です。

1.開催日時および講座内容 ～全体テーマ 「交流」～

第1回	平成9年7月19日(土)	午前10時～	;	縄文時代の交流
第2回	平成9年8月23日(土)	午前10時～	;	弥生時代の交流
第3回	平成9年9月20日(土)	午前10時～	;	古墳時代の交流
第4回	平成9年10月17日(金)	午前10時～	;	現地見学会
第5回	平成9年11月15日(土)	午前10時～	;	奈良時代以降の交流
第6回	平成9年12月20日(土)	午前10時～	;	上半期の成果

2.開催場所：守山市立埋蔵文化財センター 2階会議室

3.申込み方法：埋蔵文化財センターに電話か有線で申込みください。

☎85-4397

有線(速)38112

4.費用等：講座資料代金として1講座200円が必要です。

※お問い合わせは市立埋蔵文化財センターまで

☆ 考古学って何だろう？

「考古学」は、「^{ぶんけんしがく}文献史学」とともに「歴史学」の一部であると考えています。「文献史学」が昔の史料や古文書など文字で書かれているものから当時の政治・生活・宗教・経済などを考えるのに対して、考古学は遺構・遺物（例えば竪穴住居や掘立柱建物・^{どき}土器や^{せっき}石器など）から当時のことを考えていきます。主に文字が残っていない旧石器時代や縄文時代などしか考古学は役に立たないと思われるかも知れませんが、そうではないのです。文字が残っている時代でも考古学は大切な役割を果たしているのです。

「文字が残っているのだからその時代のことはわかるんじゃないのかな」と思っている人もいるかも知れません。でも考えてみてください。文字が残っていてもその当時書かれた文字全てが残っているわけではないのです。弥生時代の日本について中国の文字史料で少し書かれているものもあります。でもそれはその時代の日本の全てが書かれているわけではありません。^{やまたいこく}邪馬台国はどこ？なんてまだまだわからないこともたくさんあります。古墳時代には日本の文字史料がありますが、それも断片的なもので全てを知るにはまだまだです。それじゃあ奈良時代に入ると『古事記』、^{にほんしよき}『日本書紀』などの史料があるからこれでその時代がわかるの？というところでもありません。これらはその当時の政府が作ったものです。いわば上からのもので^{いっばんみんしゅう}一般民衆からのものはほとんどありません。その当時の政府にとって都合のいいことしか書かれていないかも知れないのです。中世では文字史料は増えますが、それもほとんどが武士や貴族のもので、民衆のものは数が少なく、わからないことがまだまだあります。

これで「文字が残っている時代だからわかる」といえるのでしょうか？そこで考古学の出番です。^{でばん}考古学では文字の代わりに遺構や遺物が私達に色々なことを語りかけてくれます。一般民衆の生活のこと、祭りのこと、^{そうぎ}葬儀のことなど様々です。それは「都」だけでなく、地方でも同じです。文字史料だけではわからなかったことを私達に教えてくれるのです。

守山市内で行われた調査でもそれを示してくれるものがあります。吉身の二ノ畦遺跡の調査ではその当時の文字史料には書かれていませんでしたが、奈良時代にそこに何らかの役所があったことがわかりました。また、『日本書紀』の^{じとうてんのう}持統天皇8年3月の条に^{やすでら}「益須寺」の記述が見られますが、位置は長い間不明でした。江戸時代から幾つかの候補地が考えられていましたが、なかなか確証を得ることはできませんでした。しかし、発掘調査においても瓦が出土したことから益須寺の位置がほぼわかり、また瓦の形から^{ほうりゅうじ}法隆寺との関連が考えられています。これらのことは文字史料だけではわからなかったことです。このように文字が残っている時代でも考古学は私達にまた別の^{ことがら}事柄を教えてくれるのです。調査にあたる私達は、どのような小さな事も見逃さず、考古学の意義を深めたいと思っています。

（編集後記）

6月に入ってから猛暑が続き雨が恋しい時期もありました。ところが一転7月に入って雨が続きとやれ排水だ、調査区がどろどろだなどと文句ばかりです。人間ってかってなものですな！